

あつみ ようちえん 通信



2020

vol. 36

企画・編集: (株)ASO

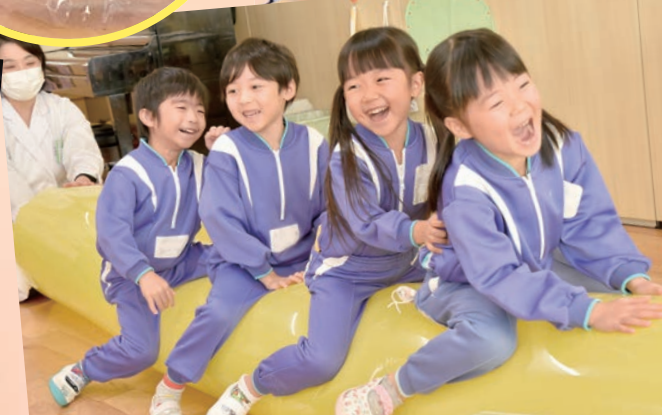


「どうかな?」「ああかな?」も考えたけども **予想**
みんなで試してみようよ **実験**

ワクワク

年長
さん

科学あそび



11月30日に取材しました。

エーッ!!
空気をつかまえる!?

“空気”には ふしぎがいっぱい!? 考えるっておもしろい!!

科学遊びのこの日のテーマは「空気」です。空気はとても身近だけれど、目には見えないし、形がないですね。子どもたちはどうやって「空気」を感じ、その不思議さを味わうのでしょうか。取材する私も興味津々。講師の大鷲先生は、子どものユニークな発想や考えをじょうずに引き出していました。

レポーター あきもと さちこ

科学あそび



「あー、すわれる!」



「うん、やってみー!」
実験っておもしろい

アイデアが出たところで、次は実際に試してみることに。空気を集めて閉じ込める実験です。黄色の細長いビニール袋に、一人10回ずつうちわで扇ぎ空気を送ると、スゴイ! 大きなバルーンができあがりました。閉じ込めた空気は、重いかな? 軽いかな? さわるとどんな感じかな? 上に座るとどうなるかな? ペちゃんこになるかな? 予想を立てて実験で確かめてみました。

すごいね! よく考えたね!

「空気をつかまえるにはどうしたらいいかな?」と問いかけると、ハイ! ハイ! 子どもたちの元気な手が上がります。「口でフーッする」「袋をゆらゆらする」「うちわであおぐ」...、お友だちのアイデアに刺激されて考えがどんどん広がっていきます。「そうだね」「すごい、よく考えたね」と先生は考えたことを褒め、一人ひとりに丁寧に応えていました。「考えること」がなんだか楽しそうでしたよ。

「ハイ! ハイ!」



あー、すごい!
ふくらんできたー



こうやって袋をゆらして、
空気をつかまえる。

をしました



細長い袋にうちわで空気を集めて
バルーンをふくらませる



空気の集め方 袋をゆらゆらして集める。

科学あそびで
取り上げるテーマは...

空気・水・磁石・鏡など、生活の身近なところから「なぜ?」「どうして?」を広げています。意外な発見や気づきがあります。



「ああ、おもしろかった！」で終わるのではなく



最後は、「おもしろかったところ」「ふしぎだったこと」を前に出て発表し、簡単なレポートを書きます。「ふりかえり」をすることで、今日やったことを整理し、自分の中にとり入れることができるといいます。



スライダーを作って、すばらせてみよう。上手くすべるかな？

教えて！先生



大鷲直美先生

科学で生きる力・考える力を育みたい！

■「どうしたらいい？」と子どもに問いかけながら進めていましたね。

科学あそびには「考える力を育む」ということが基礎にあります。自分なりの意見や考えをどんどん出してほしいんです。予想なので間違ってもいい、「考える」ことが大事です。

■家でも子どもはよく質問してきます。どう答えたらいいかアドバイスがあれば。

質問されると、つい答えを言いがちですが、逆に「どう思う？」と聞いてみではどうでしょうか。考える時間をあげると、結構おもしろい答えが返ってきますよ。

■「ふりかえり」で発表やレポートがあるなんて、本格的ですね。

これがないと「あ～楽しかった！」で終わってしまうんですね。レポートは持ち帰ってお家の人に伝えることもできます。「こんなことしたよ」と会話も弾むのではないのでしょうか。



つかまえた空気でゲームをしよう

「閉じ込めた空気って「すごい！」、を実感した子どもたちが最後に楽しんだのは空気で遊ぶゲームです。バルーン送りや空気を集めて作ったスライダーを滑らせる競争も大盛り上がりでした。「子どもたちは科学あそびが大好きで、以前やった空気砲や磁石のこともよく覚えています」「ふだんの遊びや会話にも、空気や鏡のことが出てきますよ」と担任の先生。身近なふしぎに気づく良いきっかけになっているようですね。



スライダーが楽しかった！

「こんなことが楽しかったか、不思議だったか」を発表します。



かるーい！ プンプンプンする！



空気を閉じ込めるところ！

実験のまとめをしましょう。



取材を終えて

身近なことなのに、あらためて「どうして？」と聞かれると答えに窮することってありますね。科学あそびは、テレビの「チョコちゃんに叱られる」(NHK)にどこか似ていて、いい意味で考えることがクセになりそう。正直勉強になりました！



空気を集めてスライダーを作る。机や床にパタパタすると下から空気が入る。



閉じ込めた空気は重いものを支える力がある。

こんな実験

短い時間でも気持ちがいっしょに満たされる！ 安心して無理がない「おやこ時間」の作り方

子どもと過ごすおうち時間。いつもベツタリは疲れてしまうけれど、放任も良くないと思うし。幼児期の子どもとの関わりって、どれくらい、どんなふうにしたらいいの？子どもと親との「ちょうどいい関わり方」について、専門家の先生におたずねしました。

お話／山梨大学准教授 川島亜紀子先生

園の先生たちに学ぶ「子ども対応」のポイントとは



一日中、子どもの相手をしていたら疲れちゃう。それはどんなママでもきっと同じ。あなただけではないので、まずは安心して下さいね。

幼稚園や保育園の先生のことを考えてみましょう。先生たちは、いつも子どもにくっついているわけではありません。でも、子どもが「せんせーい！」と声をあげると、次の瞬間には「どうしたの？」とその子のすぐ側で対応しています。

「必要とされるまでは放っておく」「必要とされたら、すぐに手の届くところまで近づいて対応する」「対応したら、また放っておく」という流れが完全にできています。

この流れができれば、子どもたちは、「困ったことがあっても先生を呼んだらすぐに来てもらえる」ということを学習しますから、安心して遊ぶことができます。

「呼ばれたら、こたえる。そばにいく」。家庭でもそれが基本です



これは、親子の関わりにも応用できます。

子どもに呼ばれたら、「何？ どうしたの？」と子どもに手が届く距離まで近づく。

「見て、見て」と言われたら、そばに行って「どうしたの？」「それは何？」などと会話をする。内容にもよりますが、時間でいうと1～2分くらいでしょうか。

何も特別ではなく、ごく当たり前のやりとりですが、こんな短い時間でも、親に言いたいことを聞いてもらい、やってほしい手伝いをしてもらえば、子どもはじゅうぶん満足します。

このとき大事なことは、「何かをしながら」ではなく、「今は、子どものためだけに時間を使おう」という意識を持つことです。「あなたのことはいちばん大事だから、いつでもちゃんと相手をするよ」という気持ちをしっかりと持つこと。そして、それが子どもに伝わるような関わり方を心がけたいですね。

手が離せないときは事前に説明しておくという手も



忙しいときに限って、子どもに呼ばれてイライラ……。どこかの家庭でもよくある光景だと思います。

すでに言葉でのやりとりや約束が十分にできる年齢の子どもなら、手が離せない作業に入る前に、「今からママは〇〇をするから、5時（時計の針が5になる）まではすぐにお返事で

きないよ」「でも、おなかが痛いとか、何か困ったことがあったら呼んでね」などのように、具体的に伝えておくことも有効です。「終わったら、ゆっくりお話を聞くからね」と約束しておくことも、子どもの安心感につながります。

それがまだ難しい場合は、やはり親の方が子どもの要求に合わせていく必要があるでしょう。大人はつい「あとでね」といいますが、どうしても手が離せない状況って、実はそんなに多くはなかったりします。

「あのとき、ちゃんと子どものために時間を使ってあげればよかったな」と、後から思うのはせつないもの。「子どもが求めてくるときに、1分でいいから楽しい時間をいっしょに過ごそう」、そんなふうにとちょっと発想を切り替えてみるのもいいかもしれません。

「いつでもどうぞ！」とドンとかまえると、子どもは安心します



不思議なことに、親が「よし、私はいつでも子どもが望むときに対応する！今日は子どもを最優先にする！」とかまえていると、なぜか拍子抜けするくらいに子どもの「見て、見て」「来て、来て」が減ります。「今忙しいのに」「うるさいなあ」と腰が引けているときほど、子どものグズグズはエスカレートするように感じます。

子どもと過ごす時間は大切と言っても、親はいつも子どものそばにいる必要はありません。子どもだって、ずっと親に密着されていたらイヤ。いてほしいときだけ、いてくれたらいいんです。

わがまま？確かにそうですね（笑）。でも、子どもは「自分が呼んだら、お母さんは見てくれる、来てくれる」というくり返しを通して、「自分はお母さんにとってそういう（大事な）存在なんだ」という感覚をはぐくんでいきます。

それは、これから少しずつ自立に向けて成長する子どもたちにとって、大事な心の土台になります。そう考えると、毎日の「見て見て、来て来て攻撃」もなんだか愛おしく思えてくるかもしれません。

取材・文／中島恵理子



川島 亜紀子 Akiko Kawashima

山梨大学准教授、放送大学客員准教授、お茶の水女子大学大学院博士課程修了。公認心理師・臨床心理士。専門は夫婦・家族関係と子どもの発達に関する発達精神病理学的研究。幼稚園での保育カウンセラー、講演会講師など、子育て支援の現場でも活動。著書は『夫婦げんかと子どものこころ』（新曜社）、助産学講座4「母子の心理・社会学」（医学書院）ほか。2児の母。